

《J.ダイヤモンドの警告》

「銃・病原菌・鉄」以来啓蒙されることの多いJ.ダイヤモンドの「文明崩壊」(草思社(上)73頁 2005)に次のくだりがある。

最近、モンタナとアメリカ西部全体を通じて、ある種の森林における火災の規模が増大し、その範囲も広がっている。特に1988年、1996年、2000年、2002年の夏の火災は深刻なものだった。(中略) フライフィッシングに連れていくとき、当日どこで火災が起きたかも考えに入れて釣り場を選んでいた。

それまでに聞いていたことではあるが、この夏コロラド、ワイオミングの山や国立公園を歩いて山火事跡地を見、また山火事に遭い、その深刻さを理解した。

《登山口の注意事項》

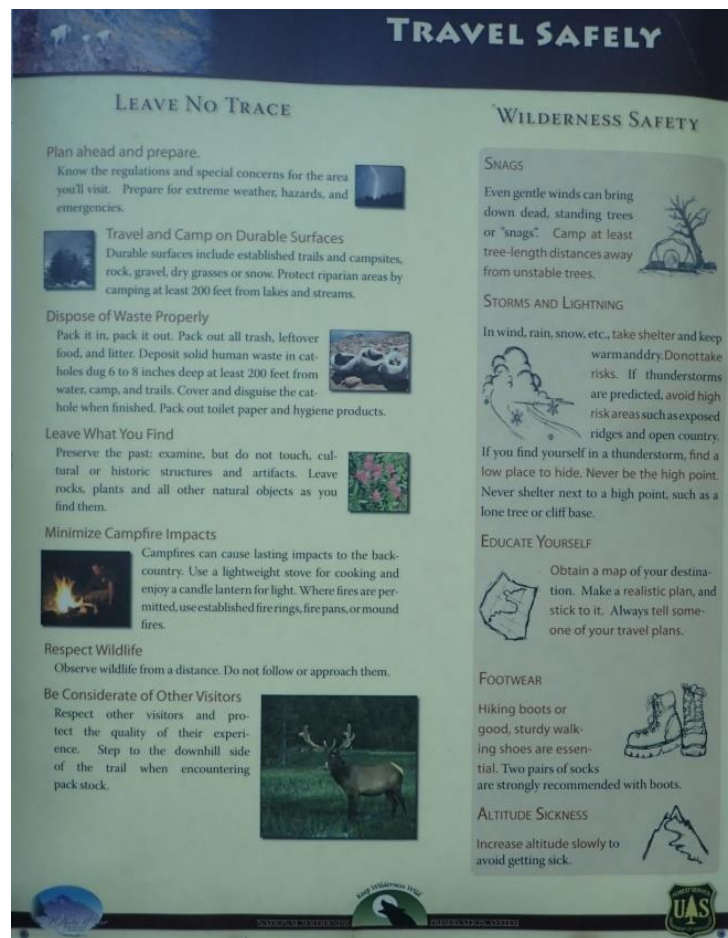
写真はコロラド14nersのSnowmass Mountainの登山口にある安全登山のための注意事項である。第1が、立っている木が穏やかな日でも倒れてくること、第2が、雷である。

第1についてはJ.ダイヤモンドも「昨日までの世界」(草思社2013)でニューギニアの現地の人に注意されても実際に体験するまで理解できないでいた。私もそうであったが、六百山に登るために上高地小梨平に露営した数年前に、側の立木を伐採している業者から、立木が倒れた話を聞いた。

幸い今回は天候に恵まれ、また午前中に行動するように気を付けていたので雷に遭わなかったが、雷が山火事の第2の原因である。第1の原因は異常気象による乾燥と森林の枯死であろう。

《山火事の跡地を歩く》

ロッキー山国立公園の人気のトレイル The Pool - Cub Lake trail と Fern Lake Trail をハイキングしたところ、いたるところに山火事跡地がある。特にCub Lakeの周囲は写真にみるように丸焼けである。



《森林は再生するのか》

「1988年、イエローストーン国立公園に発生した山火事は、その年の猛暑や水不足などによって、公園総面積の36%、約3213平方kmを消失した。(中略) 背の高い松林だったところは、草原となり、若い木が成長している。

(http://www.arukikata.co.jp/webmag/2006/rept/rept21_03_061000.html)」とあり、今回それも見た。

前述したトレイルでは囲いをし、養生しているように見えた。このように山火事跡地が再び森林に戻るという自然の回復力が、気候変動により多発する山火事に今後とも機能するのだろうか。



《山火事情報が欠かせない》

コロラド在住の知人と Longs Peak に登る朝、山が殊の外美しく見えた。知人曰く、今朝は山火事が落ち着いている。

長距離自転車レースに出場したもう一人の知人は、レース中にガスを吸い込み、調子を崩す選手がおり、レースの道路には写真のような警報が出ていると教えてくれた。

いずれも鹿児島市民の桜島噴煙予報への対応に似ており、J.ダイヤモンドが述べているように、野外活動には山火事情報は欠かせなくなっている。



《山火事で400kmの迂回を強いられた》

山火事は他人ごとではなかった。

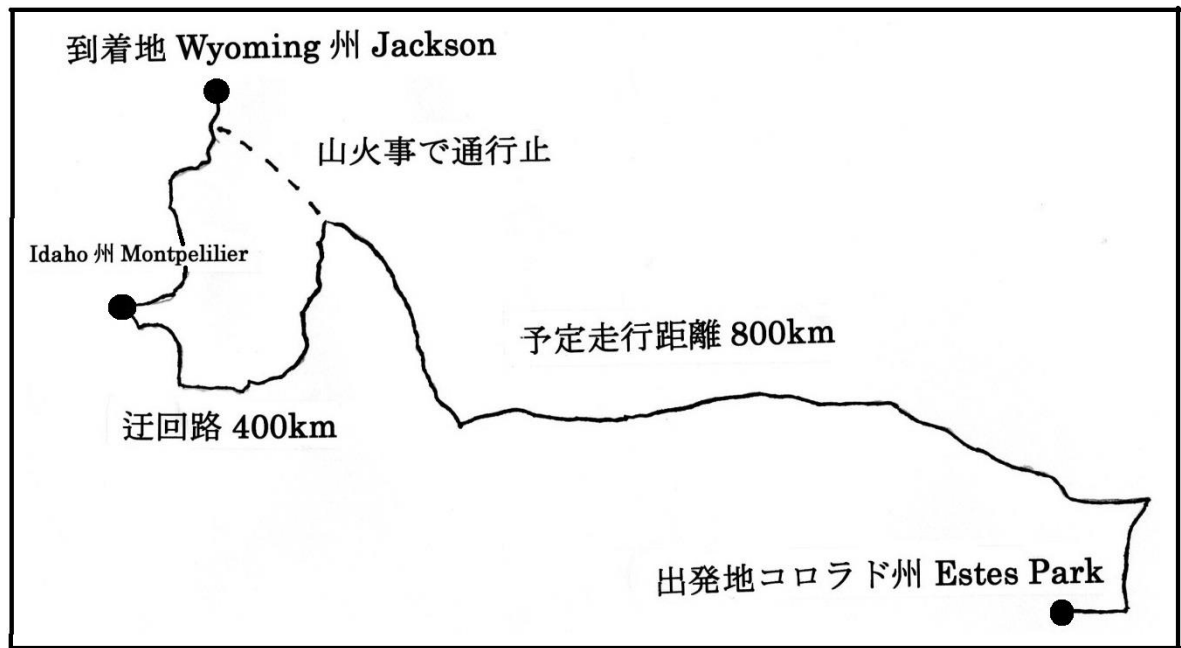
コロラドのロッキー山国立公園 Estes Park からワイオミングのグランド・ティートン国立公園の入り口 Jackson

まで800kmを移動中に巻き込まれた。順調に走り、もう1時間で目的地であり、夕食の愉しさを想像していたところ、消防士から車を止められた。山火事で通行止めと言う。迂回路を聞くと、隣のIdaho州の街まで400kmも迂回することになる。これは東京～名古屋の距離である。

ラジオの交通情報は聞いていなかったし、道路上のサインを見落としていたかもしれない。まことにつらいことであったが、技術と体力に優れた3人のドライバーが交替しながら、また幸い日本人好みの、美しい谷間の農村の風景に癒されながら、やっと Jackson に辿り着いた。

帰途は当然別の道を選んだが、ここにも山火事のサインが出ており、嫌な臭いも漂っており、しばらくは安心できなかった。

アメリカ合衆国が広いことはよく分かっているつもりであったが、この山火事で改めて強く認識させられた。



(丁)